

かたち
形式を呼吸する

2024
Ayako Kato
Violin Recital

B r e a t h t h e f o r m

2024年
10月9日(水)
午後7時 開演
午後8時30分頃 終演予定

代々木上原
ムジカーザ

2024
Ayako Kato
Violin Recital

ARTS
COUNCIL
TOKYO



主催:加藤綾子
助成:公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京[スタートアップ助成]

プログラム

1. J.S.バッハ (1685-1750)

チェンバロとヴァイオリンのためのソナタ BWV1015

J.S.Bach: Sonata for harpsicord and violin BWV1015

I. (Dolce) - II. Allegro assai - III. Andante un poco - IV. Presto

2. 灰街 令 (1995-)

BWV1001のためのパリンプセストとコーダ (初演)

Rei Haimachi: Palimpsest and Coda for BWV 1001 for solo violin

3. 西村 朗 (1953-2023)

無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ 第3番 〈炎の文字〉

Akira Nishimura: Sonata for solo violin No.3 "Characters of Flame"

休憩 PAUSE

4. H.デュティユ (1916-2013)

ヴァイオリンと管弦楽のための協奏曲 〈夢想の樹〉

H.Dutilleux: Concerto for violin and orchestra "L'Arbre des songes"

I. Librement - INTERLUDE 1 - II. Vif - INTERLUDE 2
- III. Andante un poc - INTERLUDE 3 - IV. Allegro vivace

出演: 加藤 綾子 (ヴァイオリン) 大瀧 拓哉 (ピアノ) 作曲: 灰街 令

STATEMENT

「かたち」に
生まれちゃって、
いきをする。

——あいさつにかえて

なんとなくヴァイオリニストというかたちを目指して、音楽をするために、ずっと息ができませんでした。息の仕方を鍛錬するより、かたちを叩き、溶かし、流し込み、すこし冷まして、また叩くことのほうが、ずっと大事だった。息の仕方を忘れられたので。

どうやらわたしは息をしないと生活できないらしい、と気がついたのは、最近のことだ。息をすることがこんなにも苦しいのだ。誰もが。そうして、かたちへのささやかな抵抗が始まったのだけれど、もともと最近になって、かたちとは風船みたいなものかもしれない、と考えるようになった。

かたちの中で息することはとても難しいが、水面から顔を出せばあつけないように、大事にかかえて、うなだれながら、じっと見つめる。なんかほら、案外、頬張ってしまえるんじゃないか。リスの頬袋は持ち合わせていない。

きゅー、きゅー、きゅー。

頬袋のかわりに、舌と歯と喉と肺がある。

息を忘れたみなさんに、わたしのかわりを願います。

傷んだ呼吸を身につけてゆく。

2024年10月9日

加藤 綾子

楽曲解説

解説・加藤 綾子 *一部除く

1. J.S.バッハ:ヴァイオリンとチェンバロのためのソナタ BWV1015

J.S.Bach : Sonata for violin and obbligate harpsichord BWV1015

I. (Dolce) II. Allegro assai III. Andante un poco IV. Presto

形式(かたち)をテーマに据えたとき、デュティユーの対を成す存在として真っ先に浮かんだ作曲家が、ヨハン・ゼバスティアン・バッハだった。当初は彼の無伴奏ソナタを想定したけれど、今回のリサイタルの根底にあるもの——余白、呼吸、やわらかさ——を連想し、鍵盤奏者とのソナタを選ぶことになった。

「チェンバロ」のためのソナタを現代のピアノで演奏することについては、後述のデュティユーとも議論が被るため、ここでは割愛する。息を吸って吐き、ヴァイオリンとピアノの対等なアンサンブルを、素直に受け入れてみよう。

2. 灰街 令: BWV1001のためのパリンプセストとコーダ (初演)

Rei Haimachi: Palimpsest and Coda for BWV 1001 for solo violin

(作曲者による解説)

J.S.バッハの『無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ』の「ソナタ第一番」(BWV1001)から第一楽章が下敷きとなっている。

かつて貴重であった羊皮紙を再利用するために、既に書かれた文面を消して新しい文字が上書きされたそれをパリンプセストという。本作ではあたかも羊皮紙を使いまわすように、バッハの書いた音符たちの一部を削除し、その上から音楽を書きつけ、曲の終わりにコーダをつけ加えた。

これまでのわたしのいくつかの作品にもみられたような、西洋芸術音楽の伝統の正統な伝承の不可能性、正典的作品との即物的な関係、異質なマテリアルの並置などの特徴がこの曲にもあらわれているだろう。とはいえコンセプトを抜きに構築物として興味深いものを目指したことは言うまでもない。

(演奏者よりコメント)

「無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ」というテーマで書いてほしい。このテーマを形式そのものとしてとらえても、メタ的にとらえても構わない——という旨で、作曲をお願いした。結果として、今日の開幕はくしくも「J.S.バッハ」が並ぶものとなった。演奏時間は7分程度。

灰街さんは、譜面音楽でもトラックメイキングでも、とてもうつくしい音楽をつくる作曲家である。初めて楽譜をみた時、そこには特殊なもの・奇異なもの・スタンダードなもの、といった分け隔てはなくて、ただうつくしいからそこにある音楽だとおもった。これ以上、わたしから付け加えるべきことばは、いい意味で不要だ。自分のリサイタルで、灰街さんの作品を初演できることが、うれしくて仕方ない。

3. 西村 朗: 無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ 第3番 〈炎の文字〉

Akira Nishimura: Sonata for solo violin No.3 "Characters of Flame"

西村朗は、3曲の無伴奏ヴァイオリンのためのソナタを書いている。いずれも2000年代に書かれたもので、第1番〈呪文〉、第2番〈霊媒〉、そして第3番〈炎の文字〉と続く。このソナタ集は全音楽譜出版社から出版(2008年初版)されており、冒頭に、作曲者自らの簡潔な解説が掲載されている。それによれば〈炎の文字〉は「一種の幻想曲」だという。

自筆譜は精密な設計図のようで、ヴァイオリンの4本の弦それぞれが、異なる声部のように段を分かつ箇所がある。つまり、G線が最下段、D線が下から2段目、A線が下から3段目、最上段にE線……という具合だ。2本の弦でも同じ書き方が登場する。複数人が同一の音をうたって(弾いて)微妙にずれてしまう様子を、ヴァイオリン一挺で表そうとしたのかもしれない。

基本的に、タイトル通り「炎」が表現されている楽曲だと受け取って構わないだろう。ただその炎は、暖を取るためのものではない。人々の祈り、苦しみ、そして投げ打たれる供物を貪欲に呑み込んで燃え上がる、そういう生き物だ。虚空に描かれる文字は、なにを意味するのだろうか。2007年初演。

4. H.デュティユー:ヴァイオリンと管弦楽のための協奏曲〈夢想の樹〉

H.Dutilleux: L'Arbre des songes, Concerto pour violon et orchestre

I. Librement - INTERLUDE 1 - II. Vif - INTERLUDE 2

- III. Andante un poco - INTERLUDE 3 - IV. Allegro vivace

らるぶる・で・そんじゅ。“夢想の樹”。仏語のタイトルを冠するこの協奏曲との出会いは、コロナ禍によるロックダウン真っ只中のベルギー、マーク・ダネル先生とのやりとりだった。修了試験では2つの課題——45分程度のリサイタルと、協奏曲全楽章——をクリアしなくてはならない。選曲に悩む私に、先生は見知らぬアルファベットが並ぶリストを送ってくれた。Rihm, Lachenmann, Hersant, Mantovani, Ades, そして Dutilleux (デュティユー)。

『チェロと管弦楽のための〈遙か遠くの世界〉』や『弦楽四重奏曲〈こうして夜は〉』など、デュティユーは自作に多くの名前を与え、詩人や絵のタイトルから引用することもあった。〈夢想の樹〉は作曲者本人の創作で、他には「音響の樹」や「抒情の樹」などの候補があったらしい。いずれにせよ、デュティユーはいつも、大きな樹のかたちに着きつけられていた。故郷フランスのドゥーエ、アメリカのタングルウッド、イタリアのメディチ荘……樹を前に立ち止まったり、その根本で昼寝したこともあっただろう。

協奏曲は4つの楽章と、それらに挟まれた3つの「Interlude (間奏曲)」から成る。全曲を通して楽章間はなく、一本の幹から枝葉が絶えず伸び、絡み合うようだ。3つの間奏曲では、カリヨン——鐘楼などに設置される鐘のような音色の楽器——を思わせる音形が現れる。

ヴァイオリンの最低音Gから始まり、じわじわと高音域に上り詰めていく第1楽章。鐘の音が鳴り響くと、1つ目の間奏曲だ。ソロ・ヴァイオリンによるカデンツァ的なパートは、間を置かず伴奏とともに雪崩れ込み、3連符が譜面を覆い尽くす第2楽章へ。真っ黒な音の群れはやがて一つになり、2つ目の間奏曲があつという間に駆け抜けていく。緩徐楽章にあたる第3楽章の夢想に浸かっていると、演奏者たちがとある所作を始め、デュティユーいわく「静止状態の音楽」があらわれる。なぜこれが

静止なのか、ちょっと考えさせられる。そして終楽章。打楽器的な掛け合いが繰り広げられる最中、遠くから最後の鐘が響き、束の間のまどろみが訪れる。けれど、それはほんの一瞬。鐘の音は掠れ、崩され、詰まっていき、最後は押し寄せて決壊する。デュティユーの音響は、ときとしてソリストを覆い隠すほどに厚いが、どんなに苛烈なリズムや跳躍、パッセージでも、そこには歌がある、と感じている。作曲者自身は、声楽曲に対して苦手意識のようなものがあつただけけれど。

最後に、ピアノ伴奏による協奏曲について書いておきたい。オーケストラ譜をピアノ演奏に落とし込んだ譜面は「Redcution」、つまり「縮小」された譜面とも呼ばれる。オーケストラをピアノ単独で再現するために、オリジナルの総譜から音を削り、ピアノで演奏できる要素に絞っていく。ピアノ伴奏版の協奏曲が、発表会や試験といったクローズドな場を除いてほとんど演奏されない理由は、たぶん「本来あるはずの要素を削った楽譜」という認識があるからだろう。実際、あんまりな譜面が存在することも事実で、ピアニストと共に頭を抱えるケースもしばしばある。

一方、ピアノ伴奏による協奏曲は、多くの演奏家を形作る、重要なルーツのひとつでもある。わたし自身、何度、ピアニストとともに協奏曲を弾いてきたかわからない。ある作品を受け継ぐために、その譜面を忠実に再現する試みと同じくらい、時代や人々に適した形態を選び、ひらかれた場で上演する試みも、必要ではないだろうか。今日、デュティユーの協奏曲を耳にする機会は、この国にどれほどあるだろう？ その知名度から、決して集客しやすいとはいえない協奏曲を選び、ソリストとオーケストラと会場と楽譜を確保し、巨大な予算を調達できる制作者や団体は、いま、この国にどれだけ存在しているだろう？

大きすぎるかたちを、いま、もつとも適したかたちに呼吸し直すこと。どこまでも広がる樹々の枝葉を見上げるだけでなく、ちいさな苗床にみずからの手で植え、抱え、育ててゆきたいのだ。

ARTIST PROFILE

加藤 綾子 Ayako KATO

Violinist

クラシック～現代音楽、即興、俳優やダンサーとのパフォーマンスなど、ジャンルを横断した取り組みで評価を得るヴァイオリニスト。洗足学園音楽大学および同大学院弦楽器コースを首席卒業(修了)。ベルギー・ナミュールの音楽院「IMEP」修士演奏家課程修了試験において、コンチェルト部門・リサイタル部門、共にGrande Distinction(学年最高点)を獲得し修了。

これまでに小田原文化財団、日本現代音楽協会、日本作曲家協議会、高松市美術館などの主催公演に出演。ソロ・リサイタル「正しい歩き方」(

2022)「百鬼夜行」(2023)、俳優・岡本唯との協働公演「作品」シリーズ(2022～)などを企画・制作。「作品」第3回公演は、アーツカウンシル東京 スタートアップ助成事業に採択された。信州に縁のある音楽家が集うコレクティブ「やまびこラボ」メンバー。「福士恵子 ピアニストのためのアンサンブルクラス」専属ヴァイオリニスト。ヴァイオリンを佐近協子、瀬戸瑤子、沼田園子、安永徹、マーク・ダネルらの各氏に師事。現在は東京都と長野県の二拠点で活動している。



© Ayane Shindo

大瀧 拓哉 Takuya OTAKI

Pianist



愛知県立芸術大学、シュトゥットガルト音楽演劇大学、アンサンブルモデルン・アカデミー(フランクフルト)、パリ国立高等音楽院で学ぶ。2016年オルレアン国際ピアノコンクールで優勝。その後フランスを中心に多くのリサイタルや音楽祭に出演。アンサンブル奏者としてもヨーロッパ各地でコンサートを行う。2017年にフランスでデビューCD「ベラ・バルトークとヴィルトゥオージティ」をリリース。2020年に東京文化会館で行われたリサイタルでは音楽の友誌にて「いかに作品の聴きどころを押さえ、超大作の構成を浮き彫りにし、最も大切なことに、奏者の大胆にして精緻、作曲家に忠実でありながら自己アピールにも優れた非凡なピアニズムを印象づける演奏であったか。」と高い評価を得る。

現在東京を拠点にソロ、室内楽、協奏曲のソリスト、現代音楽のアンサンブルや初演など、多岐にわたる活動を行う。愛知県立芸術大学非常勤講師。

灰街 令 Rei HAIMACHI

Composer



音が音楽として現象する時、あるいは音楽が音へと還元される時に顕れる、noise=silenceの存在に関心を持ち、作曲活動のほか、音楽学分野での研究を行っている。

国立音楽大学大学院博士後期課程の後、現在、同大学大学院研究生。作曲を近藤譲と川島素晴の両氏に、ピアノを井上郷子氏に、文筆を白石美雪と佐々木敦の両氏に師事。



Follow ME !

「加藤綾子 ヴァイオリン」で検索

Youtube

Bandcamp (アルバム配信)

X (旧Twitter)

Instagram

TikTok

加藤 綾子
メンバーシップ会員
募集中!



詳しくはこちら

演奏、企画、録音、映像、執筆……
ヴァイオリニスト・加藤綾子の活動を
ご支援いただける方を募集しています。
限定音源や過去公演のアーカイブなど、
ささやかながらメンバーシップ加入特典も
ご用意しております。

皆様のあたたかいご支援を
どうぞよろしくお願いいたします。

Special Thanks

家族

れん、ふくこ

友人たち

先生たち

メンバーシップ会員のみなさん

共演者、作曲者のみなさん

日々の生活や仕事、わたしと関わってくれる人たち

この公演に関わってくれた人たち

今日ここに来られた人、来られなかった人

みなさんに、あらためて感謝申し上げます。

加藤 綾子